



みずみどり

2006年3月15日

第53号

発行：いたばし水と緑の会 事務局

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会

<http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/>

E-mail : mizumidori@nifty.com

〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124



区内に4箇所目のヤドリギ発見

昨年1月発行の会報・第46号にて、「板橋で見られるヤドリギ」が区内3箇所にあることを報告した。今度見つけた(坂本さん)ヤドリギは、赤塚4丁目の氷川神社参道のケヤキ並木(老木)に寄生しているもので、写真のようにかなりの大株だ。昨年この参道も見て回ったはずなのだが、幹の太いところに付いているために、かえって見落としてしまったようだ。(因みに第46号で報告した3箇所は、大門見晴台付近、城址公園それに上板橋2丁目旧川越街道沿い)。

【参考】 区内でヤドリギが寄生するのは全てケヤキだが、並木の由来説明立て札によると、大正7(1918)年に槻と杉の高木の(轟轟=チクチク)並木があった由だから、当時で50

年位以上の樹齢であったと推定すると、現在は140年位にはなっている古木があるのではないだろうか。

ケヤキは成長すると鱗状や帯状に樹皮が厚く剥落するが、氷川神社にある櫟は補植された若木以外は、ムクノ古木のように細長く幹の表面全体を覆って縦や斜めに剥れているものが多い。この種の樹皮の剥がれ方をする木は、西台の天祖神社境内にも数本あるほか、上板橋のヤドリギが寄生している櫟もこの種のようなのだ。櫟はケヤキの古名とだけ記した資料が殆どだが、「櫟はケヤキの一変種で材は弓に使われた」と記されている辞書もある。(猪鼻昭二)



成増の雑木林の思い出(我が家の雑木林を中心に)

私は北区の滝野川というところで生まれました。東京への米軍の空爆が激しさを加えてきた頃、両親は、成増駅のすぐ上にある高木さんという従兄弟の家に妹と祖母と共に私を縁故疎開させました。その家のすぐ下に、小さな小川が流れていて私は妹とよくそこで遊んでいました。その川は、現在の私の住まい(赤塚二中のすぐ前ですが)の真下を流れながら、白子川の方へと続いていく川です。ごく最近、「白子川と流域の水環境を良くする会」で活動するようになって、遅ればせながら始めてその川の名が「百々向川」(ずずむき川)であることを知りました。こんな小さな川に名前があるなどとは、子供の頃には夢にも思わずに過ごして今に至ってしまったのです。でも何でこんな名前になったのでしょうか。

その土地は、釣り好きの祖父が釣りのために志木や荒川に大山の金井窪から出撃する時の拠点として買い求めていたところで、山林となっていました。その山林を始めてみたのは、昭和18年の頃だったと思います。その土地のお隣に今も住んでいますが、下田さんのお宅がありました。家の周りにはうっそうとしたスギかヒノキの林に囲まれていました。林床は暗く、なだらかな傾斜は「百々向川」に続いています。林の前に小さな畑があり、その上の道寄りに家がありました。父と縁側に腰掛けて、私はぼんやりとその畑の方を眺めていました。

そのとき、畑の隅で何かがすばやく動くのが私の目に入りました。あっ、と思った瞬間私は立ち上がっていました。灰色の動くもの、それはノウサギでした。都会育ち(?!)の小学生が生まれてはじめてみた野生動物でした。しかし、その時は分かりませんでした。後で考えてみると、ノウサギはスギの林に生息するようなことはないのです。ノウサギは下田さんの敷地の隣に位置していた藪から出てきたものだと思います。そこが、父が私の祖父から

譲り受けた山林だったのです。

滝野川の家を親戚の方に貸して、その土地に家族が移り住むようになったのは、戦後まもなくの頃だったと思います。強制疎開にあった金井窪の家の廃材を使って建てた簡素な家でした。しかし、家の敷地と60坪程の畑を含めた山林の広さは600坪に及ぶ広さがありました。転校3回目、赤塚小学校に通うようになって以来今日まで、私はここで生活することになったのです。

さて、当時のこの辺の環境はどんなであったのでしょうか。

私の家の前は畑でして、それが今考えると大変妙な形をしていたのです。いわゆる畑と呼ぶ圃場はたった2本しかない道から1メートル半も高いところにある関東ローム層の上がありました。道からは畑そのものは見えず、畑に通じる小道がありました。2本の道は150m四方の畑の真ん中を東西南北に十字に走っていました。その周辺には雑木林なるものはあまり見られず、傾斜地になっていた私の山林に似た景観を持った雑木林が、今の「アリエス」のビルの方に向かって続いていくくらいでした。

私の家の周辺の雑木林は当時から道によって、ほとんど今見られる状態に分断されていたように思います。駅から菅原神社にいたる細い道の右側の林(成増3-22付近、ここはある日伐採が行われて以来3、4年も放置されたままです。良いクヌギの林でした。)下田さんの隣の高台の今もアカマツの林(成増3-21)いま天神下公園になっている所の林、菅原神社周辺の林、その先のタイヤ公園となった林とそれに続く田んぼに面していた長い林(成増4-16~18)などであって、私のところの林と同様に、すでに失われてしまったものもあって本当に残念ですが、ほんの少し部分的に残っているものも含めるとほぼ昔の位置にそれらの林は残ってはいます。ただ大きな問題は、その残されているところの林の広さと林自身の質の問題です。

私は、小学校3年生の頃に将来は生物のことに係わって生きて行きたいという希望を持ちました。その思いを育ててくれたのは釣りに通った荒川の流れと、我が家とその周辺の林でした。

住み始めた頃の我が家の雑木林は、アカマツを主体とした陽樹林でした。このような景観の傾向は、現在の「百向川緑道」(成増3-20沿い)に面した傾斜地全体に言えることでした。しかし、上記の成増の他の樹林には、ここで見られるような多くのアカマツがあったことは記憶していません。当時その林には直径10cm程度30~40本のアカマツがまばらに生育していて(本来はもっと太くて沢山のアカマツがあったのですが、成増の飛行場の防空壕作りのために大量の太いアカマツが無料で軍に供出させられたのです)クリやコナラ、クヌギなどの広葉樹がその間を埋め、林床には1mくらいのススキがびっしり生えていたのを覚えています。そこはそのような疎林だったのです。ただ、私は生物の教師になってさまざまな林を見てきて、富士山麓や安曇野などで似たような景観に合ってはいますが、あまりこのような植生は見たことがありませんでした。もしかするとススキが多かったのは、マツが切り取られた後の二次遷移かと思いますが、そのススキ群落は広葉樹の広がりと共に林内に少なくなりました。

ここでもう少し、この林に近づいて見ましょう。

我が家の林は、まだ冬の状況が続いている2月にはいると、早くも春を迎える準備が始まり、私の心を弾ませてくれました。陽だまりには、ハコベ、ヒメオドリコソウ、イヌノフグ

り、スミレなどが茎を伸ばし始め、蕾をつけ、春が来るのを待ちきれずに咲き始めます。さらに、「百々向川」沿いに群生していたフキがフキノトウを開花させてくるとき、収穫の喜びとともに春の香りにうれしさが一杯になりました。やがて林床にはクサボケ、ギンラン、キンラン、シュンラン、エビネなどの花が咲き始め春が進んでいきます。クヌギ、コナラ、クリ、エゴ、ガマズミ、カエデ、イヌシデ、ミズキなどの広葉樹の一斉の芽生えもまた素晴らしい春の“装い”です。

5月から6月の林は木々の葉が広がり、林内はさすがに暗くなり、その辺一帯に芽生えていた針のようなアカマツの実生は、林縁を残してももの見事に消滅していくのです。アカマツが陽樹であることの証明です。その頃、毎年ほほえましい光景が展開されます。家屋の裏に林に続く細い道がありましたが、時にそこから数匹の雛を連れたコジュケイの親子が現れるのです。この林の中でコジュケイはいつからか毎年営巣していたわけです。

夏から秋にかけては、林の中はクモ類と鳴く虫たちやガの仲間の世界になります。家の軒下には沢山のオニグモが陣取っていますが林の周りには、ジョロウグモやきれいな網を張るコガネグモが思い思いの場所に自分の巣を構えています。このコガネグモは今ではもう姿を見ることが出来なくなりました。夜ともなると、林の外れの草むらからは、いろいろな鳴く虫の合唱が始まります。ウマオイ、ツユムシ、クツワムシ。家人は蚊に刺されるのを嫌がってこれらの虫の音を聴きに外に出てきませんでした。私は虫たちの合唱を聴くのが楽しみでした。また、暗闇の中でクツワムシを捕まえるのには大変スリルに富んだ瞬間でした。彼の声は大変大きいので、まず大体のところまでスーツと近づきます。1m手前からは向こうも気が付くので、鳴く間隔があきますがその間に音を立てずにまさに少しずつ足を、音のした方に寄せていきます。こちらは網を使うのではなく素手です。最後はもう一度虫が鳴くのをじっと固まったまま待ち、真っ暗な闇の中で手のひらを大きく両側から広げて気配のあった辺りを挟んで捉えます。手のひらの間に大きな虫の体を感じたときの感じはなんとも言えないものがありました。夜の火に飛んでくるガの仲間は、ヤマユガを筆頭に、クスサン、オオミズアオ、各種のスズメガなど大型のものが来てそれは見事でした。

しかし、私の目を引いたものはやはり甲虫の仲間でした。昭和29年頃の母校都立北園高校の生物部誌に採集したそのリストが載っていますが、今も人気の高いカブトムシ、ノコギリクワガタをはじめ、コクワガタ、シロスジカミキリ、クワカミキリ、ノコギリカミキリ、ヒゲナガカミキリ、リンゴカミキリ、クロカナブン、アオカナブン、コフキコガネ、タマムシ、ウバタマムシ、オサムシ、マイマイカブリ、ゴミムシ類、ジョウカイボンの類、キノコムシの類など、ほかの林に出撃しないでも多くの種を採集でき幸せそのものでした。夏の間、林の中はカ、クモ、ケムシ、ヘビの巣窟状態となりやはり家人は誰も入ることが出来ず、兄と私の天国となるのでした。

晩秋になり、広葉樹がその葉を少しずつ落としていく頃、アカマツ林の林の中に青々とした常緑の低木が目につくようになります。シラカシ、シイ、シロダモ、クスノキ、ヤブツバキ、アオキ、チャなどですが、それらの木々が少年期から青年期、そして都立文京高校の教師として教壇に立っていた昭和55年にいたるまで、次第に成長し続けついに高木層を形成していたアカマツに迫ってきていました。高校で「生態」のところを教えていると、文字通りに植物遷移を教えているその教材そのままの状況が、我が家の庭で行われていたので実感を持って教えることが出来て本当に助かりました。丁度その時、傾斜地のこの山林が宅地並みの税を課せられているという圧力に悩んでいた父と兄がついに、この土地にマンションを

建設するという決心に達しました。私は泣きながらこの貴重な林が残されるようにと願いましたが、それはあまりにも感傷的な考えだと退けられてしまいました。本当に苦い、残念な思い出です。

しかし、我が家の林は、まさに私の青春であり、定年後もいまだに高校の生物の教師として立っている基盤を作ってくれた本当に大切な環境であったのです。沢山の生き物との出会い、四季の彩り、手を触れなくとも一つのバランスをもって移り行く自然の姿、私の子供時代からの人間形成はこの成増のこのような景観の中で行われてきました。ですから私は、どのような自然に接してもすぐに少年の気持ちに帰ることが出来、そのことを誇らしく思っています。(岩田 浩司)

身近な自然ネットについて

私たちは2月11, 12日エコポリスセンターの「かんきょう何でも見本市」で、板橋区の身近な自然の現状をパネル等により展示しました。雑木林などは気がつくくと建売住宅やマンションに変わり、少し前の風景が思い出せないくらい変貌を遂げています。今残された雑木林のほとんどが民有地。地主さんが亡くなると相続税を払うため手放される例も多い。雑木林を所有していてもそこから利益を生むことはなく、維持費もかかり、なによりも地価の高い東京では固定資産税も高い。秋冬には落葉の苦情もある。とても地主さん個人で保全できるものではありません。2月26日の見学会では、区の特定樹林地になっている雑木林の木が、隣に出来た建売住宅の住民の苦情により伐採され、ほとんど丸坊主状態でした。

私たちは、このままでは徐々に消失していくことになると思われる板橋区内の残された自然地の現状をまず知り、保全を考えていく「身近な自然ネット」の活動を始めることになりました。出入り自由での会で、1ヶ月に1回程度の割合で、区内の雑木林の現状を見学することから始めます。

地下水保全陳情その後

前野町の工場跡地にできたスーパー銭湯の地下水くみ上げを抑制するよう指導してほしいという私たちの板橋区議会に対する陳情審議が1月17日にあり、いたばし水と緑の会では瀬田、坂本が傍聴しました。スーパー銭湯はもう営業しています。水は井戸ポンプの能力めいっぱい(1日288トン)汲む計画ですが、営業してみても使用量を把握したら、揚水量は288トンより下げられるという説明でした。そんなの削減でもなんでもなし。新しく井戸を掘るときは1日10トン以下しか汲めないのに、この業者は昔工場で使っていた古井戸の既得権を主張しタダの水を汲み放題に使うつもりだし、行政は何の指導もできないと言うだけ。せめて必要水量の何割か(たとえば5割とか、3割とか)を水道水にするよう業者に強く要望してほしい。環境に対する配慮もない銭勘定だけの商売はいやだなあと、またもやがっかりしながら、委員会でのやりとりを聞きました。継続審議となり、次回に持ち越されました。

横山れい子議員が12月の一般質問で、湧水保全条例の制定について質問し、これに対して区長は条例制定の方向で検討すると答弁されました。湧水(石神井川・白子川の水もわき水)のある環境を保全するには100年の計で、地道に一步一步進めていく必要があります。

ヤブツバキの話

我が家には一本の椿が植えられている。花びらの先に茶色いシミがあり、霜焼け椿などと呼ばれ家人には評判が悪い。40数年前、高尾山のケーブルカー頂上駅付近に生えていた実生の苗木を、私が持ってきて植えたものである。狭い場所なので毎年のように切りつめ、見てくれは悪いが、それなりの愛着はあるヤブツバキである。

日本のツバキはヤブツバキ、ユキツバキ、ホウザンツバキの3変種ないしは亜種に分けられる。日本海側多雪地帯に分布するユキツバキと、ヤブツバキが何時の時代に分かれたかが私の主な関心事だが、今回はヤブツバキの分布と人間の関わりについて書く。

ヤブツバキの分布と生育環境について

太平洋側では岩手県中部までの陸中海岸、日本海側では秋田県南部までやや連続的に分布し、以北にも数カ所点在し、北限は青森県夏泊半島である。東北地方以北では海岸線沿いに限られ、内陸の低温乾燥地帯や、多雪地帯には見られない。

関東地方に自生するツバキはこのヤブツバキであり、落葉広葉樹林の林床に生えるユキツバキと異なり常緑広葉樹林との結びつきが強い。特に関東地方内陸部では、雑木林などの落葉広葉樹林に本種は自生しないようだ。1950年代後半以降の話だが、新座市付近や板橋区周辺の雑木林で私はヤブツバキを見たことがない。八王子付近や神奈川県津久井付近、奥武蔵山地などの雑木林でも見た記憶はない。武蔵野台地で現在、ヤブツバキが見られる場所は台地末端の斜面で、ムクノキ、ケヤキに常緑のシラカシ、シロダモなどが目立つ森である。

板橋区では斜面林でも赤塚公園城址地区、成増1-36、成増5-6、西台1-3,7(現在消滅)のようなコナラが多い森にはヤブツバキは無い。ヤブツバキが有る森は小豆沢公園(小豆沢4-17)、西台公園西側(西台1-22)、赤塚公園大門地区(大門16)など、湧き水が有り、土壌の水分が多そうな所である。埼玉県富士見市から板橋に続く荒川沿い崖線部の同様な環境に、ヤブツバキ生育地がいくつかあるが、その分布は連続していない。

関東地方の内陸部では、高尾山や奥武蔵などの低山地の方がむしろヤブツバキは多い。北関東でも本種の生育地は山沿いのような。先年宇都宮市在住の山仲間、栃木県の常緑樹林を数箇所案内して頂いた。ヤブツバキがあったのは1箇所、出流原(いずるはら)湧水群(栃木県佐野市)という所で、そこは弁財天が祭られる山裾の地であり、湧水が豊富な常緑の森が残る場所であった。

関東地方のヤブツバキ分布地は、神奈川や千葉の海岸線付近以外では通常斜面林に限られ、台地平坦部や沖積低地には無いようである。園芸でもツバキを植える場所は、水はけのよい斜面が適し、常にジメジメしている場所や、腐葉土が多すぎる場所は避けるとされている。

ツバキは古代、聖なる樹であった

ツバキは万葉の昔から人々に親しい植物であり、古代では霊力を持つ聖なる樹であった。日本書紀にある土蜘蛛誅伐ではツバキの椎(ツチ=槌)が武器として使われている。古代の宮廷儀礼、年頭の悪魔はらいに用いられた卯杖は、桃の木とともに椿が使われていた。東大寺二月堂のお水取りでは椿の香水棒(こうずいぼう)を使い、造花の椿が飾られる。人魚の肉を食べ、八百歳の長寿を得た若狭の八百比丘尼は椿を携え、諸国を巡ったという。

ツバキの霊力の起源にはなにか即物的なものがあつたはずである。成長が遅く硬い材質のツバキは器具材として有用なものであつたらう。細いツバキは多いが、年月をかけて大木となるツバキは数少なく珍重されたのであろう。

ツバキの花が咲く地は清冽な泉が湧き、冬の季節風が避けられる場所であった。縄文前、中期の温暖な時代は去り、3000年前縄文晩期の気候はかなり寒冷化する。紀元前400年ごろに一旦温暖化する

が、紀元 100 年頃からの寒冷期は古墳時代まで続く。弥生から古墳時代に大陸から渡来し、日本列島を北上した人々は、ツバキの花が咲く温暖な地に安住の地を見出し、泉とその背後の山に祈り、そこを神域としたのであろう。冬の季節風が荒れ狂う日本海沿岸で、人々は風を遮る山に向かい、祈ったではなかろうか。

元思想の科学編集長山田宗睦氏は、京都の椿井大塚山古墳のそばにある湧出宮の祭事から、ツバキと水の密接な関係を推測している。湧出宮は小扇状地末端の湧き水を祭ったものである。氏は若狭の八百比丘尼の地に流れる遠敷（おにゅう）川の水は、東大寺二月堂の地下に通じているという伝承を紹介している。川崎市の白山古墳の遺物から椿井大塚山古墳主の支配は関東まで及んでいたようだ。

ヤブツバキはどこまで自然分布か

ヤブツバキの北限、青森県夏泊の椿山にツバキの実を待ち望む女人の悲しい説話が伝承されている。柳田國男が自著に取り上げ有名になった話である。八百比丘尼が各地にツバキを植えたという伝承にも注目し、柳田は北陸以北の日本海沿岸のツバキは人為的に植えられたものと推定している。秋田県男鹿半島より北では、ヤブツバキの分布地は夏泊も含め 3 箇所、特に夏泊は孤立した産地である。

関東以北の太平洋側のヤブツバキ分布もあまり連続していない。太平洋側の北限に近い大船渡の三面椿は、樹齡 1200 年と伝えられ有名である。宮城県、福島県には孤立した内陸部の産地も少数あるようだ。関東地方でもヤブツバキは、どこにでもある普通の木という訳ではなさそうである。万葉集に「わが門の片山椿まことなれ・・・」という武蔵国荏原（今の太田区辺り）出身の防人の歌が載っている。わが門、自宅にわざわざ植えたのは、ツバキがどこにでもある花ではなかったからと推測される。

夏泊の伝承にもあるように椿油は当時の貴重品で、渤海国の使節も持ち帰り、遣隋使も持参するほど品質は優れている。しかし生産地は少ないようで、東日本の生産地は伊豆諸島以外では過去も現在もないようだ。ツバキの炭も優良だが、産地は限られている。「紫は灰指すものぞつば市の・・・」の歌にあるように紫染には媒染剤としてツバキの灰を使う。ところが江戸の紫染めではツバキの代わりにヒサカキの灰を使う（足田輝一 1977 による）。

北区中里遺跡では縄文後・晩期のヤブツバキ材が 2 点（0.2%）出土している。ツバキは虫、鳥媒花で花粉の産出量が少なく、遺跡などの花粉分析にも出難い。赤塚城址や早瀬前遺跡では縄文晩期から平安のツバキ花粉が少量出ている。福井県の鳥浜貝塚では多数のツバキ材、器具、花粉が縄文前期以降出土しているとは対照的である。以上から関東地方では縄文晩期以降ヤブツバキは局地的で、特に内陸部ではあまり多くない植物であった、と考えて良いのではなかろうか。

大方の植物学者はヤブツバキの分布は自然分布とみているようである。筆者の結論も同じだが、秋田県北部以北のものについては人為の可能性もあると見ている。ツバキの種子は大型で散布はノネズミなどの哺乳類に頼る。同様の大型種子を持つ常緑カシ類の北限は大体山形県、岩手県南部までである。青森まで北上している照葉樹林の樹種は、鳥散布のタブのみである。照葉樹が北に分布を拡大するのは 1 万年前以降、気候がかなり温暖になってからであろう。本格的な北上は日本海に暖流が入り、尾瀬などの山地湿原の泥炭堆積が始まる 8000 年前頃以後であろう。日本海沿岸では多雪と温暖の両条件が満たされた時以後である。陽樹の性格が強く、種子生産までの年月が短いヤブツバキは分布拡大のスピードはカシ類よりも速いと考えられる。縄文晩期以降の寒冷化、弥生中期以降の人為的干渉によりヤブツバキの分布地は縮小し、点在するようになった。ヤブツバキ分布が縮小、孤立化すれば、それに頼る昆虫も絶滅する。ツバキの固有の蛾、クロシタシャチホコは東日本ではどこでも希な種だが、新潟県や岩手県でもほんの数箇所だけが発見されている。遺存的性格が強い本種が生息することは、ツバキ自然分布の傍証になる。やはりツバキ固有のツバキギゾウムシは最近宮城県でも発見されたが、関東地方でも少ない種である。スギタニモンキリガ類は 3 種が混同されていたが 1990 年に分類上

の整理がなされ、ツバキの花を幼虫が食べるのはスギタニモンキリガ1種とされた。1990年以前の本種の記録は再検討が必要だが、いずれにせよ関東以北では少なく、東北地方の記録は未見。東京付近では近年本種が増えているようだが、温暖化との関係は現時点では不明。荒川崖線部には昔から生息していた可能性もある。(自分用のメモ書きみたいな原稿で、ここまで読み通して頂いた読者に感謝する。次回にはユキツバキとその種分化の話を予定している。)(釣巻岳人)

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

4月運営委員会： 4月7日(金) 18:30~20:30

3月運営委員会： 5月5日(金) 18:30~20:30

いずれもエコポリスセンター環境学習室です。

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく(今月は16日になります)

日時：5月16日(火) 18:00~ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に自然観察やゴミ拾い、課題があった場所について別途必要な修理等を行っています。原則として雨天も実施します。

3月の活動 城址観察会

桜が咲きはじめているかもしれません。春の気配をさがしましょう。

日時：3月25日(土) 10:00~12:00 集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

総会

日時：4月22日(土) 14:00~16:30 場所：エコポリスセンター

総会后、「むらさき」で懇親会を開きます。

身近な自然ネット 雑木林見学会

日時：4月1日(土) 10:00~12:00

集合場所：常盤台駅南口改札口

天祖神社・氷川神社・安養院・城北中央公園・民有地の樹林地を見ます。

場所：エコポリスセンター

生き物のすめる環境整備の活動

3月29日(水) 10:00~12:00 4月5日(水) 10:00~12:00

集合場所：赤塚トンボ池

4月5日以降の日程は未定。お手伝い下さる方は連絡下さい：坂本3968-9760

(090-4618-1295)